

第5回俳句賞「25」選考会報告

第5回俳句賞「25」のダイジェスト版となります。書き起こしではございませんのでご承知おきくださいませ。

第5回俳句賞「25」選考会は2022年3月19日（土）に行われた。本年も第3回、第4回に引き続き、オンライン同時配信型の選考会とし、先行会場には岸本委員と高柳委員と実行委員会メンバーのみが集まり、遠藤委員はオンラインツールを用いての参加となった。また、選考会は十分な感染症対策の下行われた。予選の結果は以下の通りとなった。

第5回俳句賞「25」 集計結果

(1席4点・2席3点・3席2点・4席1点で計算)

順位	番号	表題	遠藤委員	岸本委員	高柳委員	合計得点
1	9	書き出し	4	2		<u>6</u>
	26	国境		3	3	<u>6</u>
2	18	火やつかむ	1	4		<u>5</u>
3	35	風の記憶			4	<u>4</u>
4	10	あくびのいろ	3			<u>3</u>
	15	サビだけの鼻歌	2		1	<u>3</u>
5	23	喰らふ			2	<u>2</u>
6	14	霾るや		1		<u>1</u>

..... ↓ 予選通過作品選評 ↓

岸本委員の四席：14「霾るや」

(岸本委員)

「立春や教科書にある開きぐせ」は明瞭で綺麗な形の句。1年使った、開き癖のある教科書。春初め、立春の句ではあるが、学年の年度が終わる季節感を取り入れている。

「路側帯こほりみづ待つ列曲がる」は囁目、目の前の情景をスケッチした無駄のない句。「路側帯」はあまり詠まれていない句材だが、うまく詠んでいる。

「仏像のあをき玉眼火恋し」は仏像の眼はたびたび詠まれるが、下五においた晩秋の「火恋し」への展開が心地よい。

「キリストのはりつけ猫の日向ぼこ」は発表するのに度胸がいる句。少しふざけた、不謹慎

な笑いの感覚。磔のキリストとだらりと伸びた猫と2つのものをたんとと並べるにとどめて、それ以上面白く語っていないところに俳諧味がある。

「慰霊碑に敬礼の翁寒椿」は詠まれている視点・句材はどこか年寄りじみているが、季語「寒椿」の効き方などに、それを感じさせない引き締まった印象を与える。とりわけ高校生が詠んだ句と知って見ると驚き。勿論おじいさんが詠んでいてもいい句。他にも「サーカスのあと冬薔薇なほかをる」など、捨て難い句が多い。

(遠藤委員)

俳句の定型に馴染んでいて、季語と内容に調和がありつつ既視感や常套的なところがない。大胆な句がある。

「立春や教科書にある開きぐせ」は少しくたびれた感じの教科書。

「百日紅ノートに不等式掠れ」などは、学生らしさを感じる句。

「冬の蠅洗濯物に値札タグ」は視点が細かく、思いがけない設定に驚いた。

「キリストのはりつけ猫の日向ぼこ」は大胆な一句。不謹慎というより、面白さを感じた。

「白に青混ぜはくちょうの羽ゑがく」は白鳥の周りの冬の風景も感じさせる。色彩感覚が繊細。

「サーカスのあと冬薔薇なほかをる」は祭りの後のさみしげな感覚と冬薔薇がうまく調和している。

他にも「若水や骨をかくして生きてをり」など、高校生の割に大人びた立派な句が多く、全体的に高評価。

(高柳委員)

淡々と描きつつも、どこか外連味、華やぎを感じさせる句が印象的。

「木枯らしの行方を知らず龍馬像」は木枯らしと龍馬像だけを淡々と描いても成立するが、「行方を知らず」と言ったところに寓意性、外連味が表れている。評価が分かれるところではあるが、賞の場では多少こうした目立ったアピールポイントを作った作品は十分評価したい。

「白に青混ぜはくちょうの羽ゑがく」は「常套的には白鳥そのものの色を描写するものだが、絵に描かれつつある白鳥を間接的に描写したのという捻りがきいている。細かい点では、「ゑがく」が歴史的仮名遣いで「はくちょう」が現代仮名遣いなのが気になった。¹

「お手植ゑの松を見過ごす秋日和」「初雪や若き絵描きの鼻眼鏡」などにもおかしさが表れていて、単体として読者に訴えかける句が多かった。テーマ詠の連作が今年が多いように感じたなかで、ひとつひとつの句の力強さで勝負する作品。

¹ 一般的な国語辞典では「鳥」の歴史的字音仮名遣いは「てう」とされる。

(視聴者)²

情景の中の具体的な一点を読者が感じられるように描いている。そこからふわりと詠み手の感慨が伝わってくる。

高柳委員三席：23「喰らふ」

(高柳委員)

先ほど触れたテーマ詠の連作の一例。「食べる」という人間の根源的営為を中心として、力強さを感じさせる句が多かった。

「電話出る前にデラウェアを抓む」はあえて崩した調べととるべきか。本来であればそこまで悠長なシーンではないが、もうひとつ葡萄をつまもうとするところに人間らしさ、リアリズムが出ている。

「桃冷やすアイスボックス潮に濡れ」は下五で一気に海のイメージが展開するところが巧み。風景とともに登場人物の様子も見えてくる。

「元日のコーヒーゼリーミルクなし」は真っ黒なままのコーヒーゼリーの色調が目の前に提示される感覚。元日に深い漆黒と向き合わされるとところに詠み手の心境を思わせる。

「年の豆十八才の頼りなさ」はかなりストレートに書いた句。年齢は数字で意識していても普段目に見えないが、豆の数を通じて目の前に現れた時、18 という年齢の背景をより深く思われる。

(遠藤委員)

「食べる」行為を中心として、さまざまなシチュエーションが描かれ、ドラマに広がりのある作品。

「冷奴十五分後に客の来る」「ピーナッツ名盤を聴く宵のうち」「スーパーの面接終へて根深汁」など、背景にある人物像を感じさせる句。テーマ詠の前提を抜きにして読んでも、「給食の前向く机初桜」「綿菓子に舌に消えたり春惜しむ」「仏壇の林檎の側の手紙かな」「年の豆十八才の頼りなさ」など読みごたえのある句が多い。ただ、魅力的な句が多い中、若干そのまを描きすぎた句も目についた。

(岸本委員)

食べ物が季語である句と、季語に食べ物を合わせた句の両方がうまく配置されてメリハリがついていた。それ以外にも、作者が主語になって行動や出来事を中心に描く句と、物を中心に描く句、いわばコト・モノの2種類の句のコンビネーションもうまくとれている。ないものねだりをするとすれば、いくつか食べ物に関係ない花や天文の句を要所に混ぜても魅

² 第5回俳句賞「25」は新企画として、1人1票の「観客投票」を募集した。

力のある作品になったかもしれない。

高柳委員四席・遠藤委員三席：15「サビだけの鼻歌」

（遠藤委員）

見過ごしてしまいそうな、日常の当たり前の景のなかのきらきらとした華やぎを丁寧に切り取った句が多い。

「コンタクト世界のふちの消えて春」は比喩が感覚的だが、共感しやすい。

「あと何度歩ける道やつくしんぼ」は景自体は普通かもしれないが、日常を愛おしむ心を感じさせる。

「ひつそりと神輿の眠る朝の蔵」「山峡の朝日すひこむ冬の霧」などは、淡々と描かれながらも壊しがたい世界。

「窓越しの花火や一合米を研ぐ」「母作るカルピス薄き夏の夜」「思ふままピアノを弾きて冬深し」など、素直だが等身大を描いた魅力的な句も多い。

（高柳委員）

自分のまわりのモノ、景色、人物を中心に作った句が全体的に多い。読者が詠み手の身の上に自らを重ね、共感しやすい作品になっていた。

「コンタクト世界のふちの消えて春」は西東三鬼「算術の少年しのび泣けり夏」のように、最後にぽんと季語を置く構成。雑に感じられることもあるが、この句の場合は「春」が動かず確か。

「窓越しの花火や一合米を研ぐ」は「一合」の小ささ、花火の窓越しに見る情景にもの寂しさがある。「や」を取っても成立するので、そこは気になった。

「子どもらはからだで笑ふ霜柱」は霜柱で子供が遊ぶ句は多いが、その類想を狙いつつ、「からだで笑ふ」という切り取り方でうまく切り返し、独創性のある句になっている。

「景品のぼうしでひとりクリスマス」は景品の帽子の安っぽさ、もの寂しさに「で」の濁った音が不思議と効いている。

「暖房やダンジョンにいま籠城す」はゲームの中の景か。あたたかい暖房の中でゲームに没頭している自分を客観的に捉えているのが面白い。

（岸本委員）

「流星のなびく光の静けさよ」「永遠のなにかを願ふ星祭」「思ふままピアノを弾きて冬深し」「トナカイの虚ろな瞳クリスマス」など、深淵に吸い込まれるような感覚を思わせる句が印象的。一方、「春夏秋冬」の文字をそのまま使った句で、取り合わせの距離感に工夫の余地を感じさせる句がいくつかあった。

遠藤委員二席：10「あくびのいろ」

（遠藤委員）

全体として明るい光の差しているような印象を受ける作品。言葉を飾らず、表現を律して、言いたいことを正確に言葉にしている姿勢が好ましい。

「薄氷掬いて落つる雫かな」は観察が細やかで、正確な描写。

「父に負けさうな将棋や麦の風」は季語がいい。手元の細やかな視点から、外の広い情景に移っていく展開がよい。

「はりついてあたたかな目の守宮かな」は、ぼーっとしているようで柔らかい守宮の目の特徴を捉えた。

「校庭のソーラン節や昼寝覚」は少し意外だったが、気持ちのいい句。

「ほうたるはたれもあくびをしてをらず」は、ほうたるを擬人化した句か。少し強引かもしれないが、優れた感覚の句として鑑賞することができた。

「スカートの裾の絵の具や文化の日」は美術室の光景がよく見えてくる。

「掛けくれし人も毛布に眠りをり」は、二人以上の人の温かな息遣いが見えてきた。

題名も連作のせ世界の持つ温かさとおっており、若々しさも感じた。

（高柳委員）

学校・学生生活の一年間ということがわかるキーワードが折々に入っており、テーマが非常にわかりやすく示されている。

「休暇明指より長きチョーク落つ」のチョークは休暇明の新品だろう。指とチョークそのものではなく、両者の長さを比べる発想は意外だった。「落つ」ということで長いチョークの落下、更には割れたのかもと思わせるところがよかった。

「掛けくれし人も毛布に眠りをり」は小説の一文にもなりそうな内容で、非常に音数がかかるような内容だが、よくぞ17音で。

タイトルもいいが、元の句の「ほうたるはたれもあくびをしてをらず」の「は」は的確だったのか。飛ぶ蛍が光っていて「あくび」のような緩みがないということなのか、蛍を見る我々が息をのんでみていて「あくび」をしていないということなのか。

（岸本委員）

物を詠んだ特徴的な句は、「底冷や画鋏めり込む掲示板」、そして隣の「小春日やナイフに沈むパンケーキ」。それぞれめり込んだり、沈んだりしていて、取り合わせの季語もよく考えられている。「校庭のソーラン節や昼寝覚」、「ささやかな嘘を麦茶と流し込む」はとぼけた味わいがよい。「はりついてあたたかな目の守宮かな」はやわらかで、「薄氷掬いて落つる雫かな」はきっちりとした写生でと、バラエティに富んでいると思った。ただし、ややメリハリがつきすぎて、何かが足りないわけでもないのだが、統一感がない印象も受けた。一句一

句の出来は申し分ない。

(視聴者)

「蟻の列着々と堤防を越ゆ」が良い。青春や学校というものを、他のどのチームより、寄り添って描写していた

高柳委員の一席：35「風の記憶」

(高柳委員)

繊細さと大胆さの塩梅が非常に釣り合っていて、訴えかけてくる俳句が多かった。

一句目の「自転車の籠に斜めや麦わら帽」は、大づかみな景だが、その根拠には繊細な感覚が働いている。麦わら帽は人の頭にあるときは「水平」だが、籠では「斜め」になっている。これから自転車で遊びに行くときの光景か。

「初秋のイヤホン越しの風の音」は思いかけない風の捉え方で、イヤホン越しが工夫されている。和歌³を踏まえた知的な捉え方でありつつ、同時に感覚的でもある。耳がふさがる向こうに聞こえてくる掠れたような風の音。

「水飲みしあとの舌先冬近し」は、舌先の少ししびれるような冷たさに冬の接近を感じる。一年中水は飲むものだが、よくぞ言い当てたと思う。

「冬夕べいつも金星探す癖」は、ただ金星を探したいのではなく、明るい星を目にしたいと願う心細さの反映なのでは。世界で自分が立っている今ココの根拠の弱さといった感覚。

「握りたる切符の黒き面に汗」は、本来の切符の使い方だと使い終われば捨てられる乗車記録・証明である。この句は丹念に描写し、切符という素材に詩心が宿っているという感動を与えてくれた。

「演説の襷の肩に来る蜻蛉」は、演説をする人間やその発言内容にはあまり関心を払っていない。作者の感性は伝統的な俳句の感性である。完成度の高い一連であると思う。

(遠藤委員)

作中主体の心理が伝わる一方で、雰囲気の流れていなくて、きちんと物で読者に伝えようとしている。物そのものに詩情がある。丸をつけた句が多い一連だった。

「自転車の籠に斜めや麦わら帽」はこの細かい様子・普段との違いまでよく詠んだなと思った。

「中敷のロゴ消えかけて夏の果」はスニーカーなど靴の中敷かなと思う。

「冬めくや鳥居を栗鼠の駆け抜けて」は何でもないが、栗鼠の走り抜ける命を感じる。

³ 『古今和歌集』に収録の歌で、藤原敏行の詠んだ「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」

「遊歩道聖夜の明かり途切れなく」は聖夜だからこそその明かりをよく捉えている。

また身体感覚が若々しくて、瑞瑞しくて鋭敏である。「シャーペンをまた持ちかえて日の盛」、「水飲みしあとの舌先冬近し」は「冬」が動かないだろう。羨ましくなるような感覚として、「蠅螂を掲げて君は無敵なり」、「秋うらら廊下に友の背を叩く」は学生時代の映像がぱっと浮かんできた。「冬夕べいつも金星探す癖」もいい。

最後25句目の「目を落とす液晶氷る君来ぬ夜」もまた眩しい青春詠である。

それでは何故上位四席に入れていないかということになるが、あくまでも私自身の嗜好や好きな世界が反映された四編を取ったということで、逆にいうと35番を取らないという理由もなかった。

(岸本委員)

一步踏み込んだ句がいくつもあった。

「自転車の籠に斜めや麦わら帽」は「籠」ではなく、「斜め」まで言う。「水鉄砲打って打たれて濡れし髪」は「打つ」だけでなく「打たれて」まで言う。「傘閉じて伸びをしてこの梅雨夕焼」は「傘を閉じる」だけでなく、その後の「伸びる」まできちんと言う。

「目を落とす液晶氷る君来ぬ夜」の「目を落とす」という上五の印象的な入り方がいい。

「冬夕べいつも金星探す癖」は「金星」があると詠むだけでなく、「探す癖」まで言う。

全体として俳句の形に破綻がなく、詠んでいてよい。ただ下五に季語を置く句が、「日の盛り」～「夏の果」まで並んでいる。内容はどれもよいのだが、読んだときの調子が揃いすぎてしまって惜しいということを申し添えたい。

(視聴者)

風という言葉を使っていない句が多いのに、たしかに風を感じた。

風らしい爽やかな抒情を感じた。

岸本委員の一席、遠藤委員の四席：18「火やつかむ」

(岸本委員)

とてもいいと思った句を挙げる。

「秋蟬や柵の錆びたる海の町」は、「秋蟬」と「海の町」の取り合わせが自然だが、とても広がりがある。

「太刀魚の大きくしなる腕の中」は釣り上げたのか、太刀魚の大きさや光沢の存在感がある。挑戦的なのは「餌に集く鯉の間抜けを霰かな」。状況としては池の鯉への餌やりだろう。霰が鯉の頭や水面に当たる。口を開けた鯉の顔が「間抜け」。

「数羽の鳩白し寒暁広ごりぬ」は冬の明方である「寒暁」に「鳩」が数羽という、公園か広場かの或る意味何もないような空間にひとつ世界ができている

「犬小屋に戸のなかりけり麦の秋」の発見はよくわかる。

「魚屋の釣銭濡れて城ヶ島」は地名にも説得力がある。

「檻の獅子空蟬を踏み毀ちたる」は動物園のライオンの檻か。

今挙げた特にいい句以外も傷が少なく、総合的に最もよいと感じた。

(遠藤委員)

骨太な連作だと思った。古語と文語を駆使し、語彙も豊富で、攻める姿勢がある。しかし詠んでいることは古めかしいものではなく、現代の自分たちの見る情景を詠んでいる。

「秋蟬や柵の錆びたる海の町」はよい。

「太刀魚の大きくしなる腕の中」は質感や量感が手に取るように伝わる。

「冬銀河その譜は未完かもしれず」など、大きな堂々とした句柄がよかった。既に先人によって詠まれている部分もあるだろうが、作者の実感がある。

「春燈やまた倒しみる不倒翁」の「不倒翁」は「起き上がりこぼし」のことで、語の選択も評価したい。その隣には「犬小屋に戸のなかりけり麦の秋」というさらっとした句を置くバランス感覚。更に隣には「悔いのごとくラムネの玉のみづ色は」。主観の入った句だが、具体的なもので詠んでいるので共感を生む。

非常に凝っていて、雰囲気流れないで、またくどいと思うほどの攻め方も世界を作っていることもあり、四席に推した。

(高柳委員)

全体的に実直に作っているが、アイロニーという冷たい刃が時折きらめくのがよい。

一番好きなのは「餌に集く鯉の間抜けを霰かな」。この「間抜け」は鯉だけでなく、人間社会の寓意とも読んでいいのでは。

実直な句でいうと、「三月や浅草濡らす天気雨」。「浅草」に集う仲見世通りの観光客も見えてくる。

「春燈やまた倒しみる不倒翁」には何度も倒す春の憂いを感じる。

「手に鍵が揺れて流星群の夜」はロマンチックすぎるがひとつの世界が構築されている。自宅か誰かの家に行く鍵の硬質な音と、空の流星群の二つのイメージの中で重なる。BUMP OF CHICKENの「天体観測」のような世界。俳句も歌謡曲から学んでいけばよい。

ただ、全体的でみると、超現実的であったり生活に即した句があったりと、統一感に欠くように思った。そのバラバラ感を多彩と感じるには至らなかった

岸本委員の二席、高柳委員の二席：26「国境」

(岸本委員)

癖のある作品である。

「鞆に立ち見る母に旋毛かな」は、子どもがブランコに立って母を見ていて、その母に対する感情は全くわからないが、ただその状況自体がとても面白く、謎めいていている。

「拍手して二の腕揺る残暑かな」は中年を過ぎた人間の肉体の肉がたぶたぷしているという冷静な描写と、「残暑」という一種残酷な季語が面白い。

「きりぎりす裏の空き地で紙芝居」、「勝手口梔子の花たそがるる」は懐かしい感じ。

「炎昼の昨日のままの砂場かな」は頭から読んですっと景色が心に浮かぶ。

「風薫るキウイ畑の廃車かな」はうらぶれた風景だが、瑞々しい季語がついていること。連作全体として俳諧の妙味、複雑な味わいがあった。

（高柳委員）

バラバラ感は否めないが、何かひとつ俳諧みというか、気張ったところを解すようなものが多かった。

「風薫るキウイ畑の廃車かな」は農家の税制対策であるような小規模な果樹園で、「廃車」があるのも衰退していく日本のよう。「風薫る」、「キウイ畑」、「廃車」というこの三つの素材を一句に入れようという発想はなかなか生まれない。

「勝手口梔子の花たそがるる」は「勝手口」の俗な感じで情趣を少し崩した控えめな情趣。

「冬空にがつつくメンチカツサンド」は、「空の下で」という表現を縮小した「に」の助詞がよいと感じた。

「眼前の尻に濡れある潮干狩」は惹かれるところがった。星野恒彦の句に「まんまるくお尻濡らせり汐干狩」など、濡れた潮干狩に先行句はあるが、「眼前」で類想を抜け出している。ただ、「オロナミンCが美味しければ夏」は最後に季語をぽんと置いていて、この句は雑な印象を受けた。

（視聴者）

「オロナミンCが美味しければ夏」の句が面白い。

（遠藤委員）

お二人が二席で押すのも分かるほど、味わい深い作品である。ここに立ち止まらずに、すつと通りすぎてしまったので、私も殻を破って審査しなければならないかなと思った。よくよく読んでみると、言葉が率直で通俗を恐れない、雑多な魅力がある。

「亀鳴くか通知音かと思ひけり」、「鞆に立ち見る母に旋毛かな」など魅力的。

「オロナミンCが美味しければ夏」について私は気に入った。夏にも負けずという感じを受ける。

「風薫るキウイ畑の廃車かな」は廃車という素材でありながら美しく詠まれている。

表題にある「汽車は国境を越え続ける九月かな」は初読のときから印象的だった。

「靴紐の金具のひかり福寿草」は「金具」から更に一步踏み込んで「ひかり」まで言う。

色々なところから句材や発見を引き出している句だと思った。

遠藤委員の一席、岸本委員の三席：9「書き出し」

(遠藤委員)

内容も季語也多岐にわたり、層が厚い。表現に曖昧さはなく、それでいて若々しさもある。具体的な物で押した季語があり、情景が立って来る。

具象的に詠んだ強さが25句を通してある。

「鉄塔に深き傷跡春の蝶」の「深き」はよく使われる形容だが、これはよく情景を伝えている。

「廃校舎いま春塵の部屋となる」は句柄が大きい。

「ねんねこや板チョコの割れ目は斜め」の割れ方は共感性がある。季語の離れ具合も納得。視点にオリジナリティがあるのは、「吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす」。強引なところもあるが、納得感がある。

季語が馴染んでいる句が多いと思う。例えば「うつすらと亀に唇ある夜涼かな」は「口」ではだめで、「唇」がよかった。更に「うつすらと」に生々しさがある。亀の口に焦点をしっかりと定めてから、そこから季語で情景を広げていく巧みさ。

「山粧ふ脚立を出してゐる隣家」は遠近法が効いている。

「鈴虫や地盤のゆるき町の昼」はこれも「地盤」と「鈴虫」の大小。

「猛犬の尾のなまぐさき野分かな」はよくできている。

全体として多岐にわたる世界と。

「小満や傘より腕のつめたくて」は作者自身の若々しい感覚がある。

「綴るごとくに薄氷の出来上がる」の「綴る」の比喻は精緻。

(岸本委員)

遠藤委員の言うとおりの季語がこなれている。

「鉄塔に深き傷跡春の蝶」の「春の蝶」の使い方の先駆けには高野素十の「方丈の大庇より春の蝶」がある。「春の蝶」を入れないとバランスがとれないという判断に納得。

「廃校舎いま春塵の部屋となる」は「春塵」の使い方として意外性と納得感があつた。

「校庭の砂利硬かりし風光る」は砂利の硬さを掴んだ上で、季語の「風光る」が生きている。

「小満や傘より腕のつめたくて」も季語の「小満」をよく捉えている。

「うつすらと亀に唇ある夜涼かな」の「夜涼」という季語の手触りのなまなましさは「亀の唇」の発見につながる。

植物の季語でいうと、「ほそぼそと蕎麦屋のつづく夾竹桃」、「乾ききる前の小径や金木犀」。それぞれの場面設定において無理のない季語の斡旋である。

「吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす」のとぼけたような「きりぎりす」。「吸ひ殻」というモ

チーフの後味の悪さを引きずりながらの「きりぎりす」が良い。

「花よりも水透きとほる屋寝覚」は狙いがばれてしまうかな。

「凍滝をとほく校倉造かな」は「凍滝」と「校倉造」のふたつのものがぽつんと離れてある。季語を一句の中心にしっかり据える姿勢が素晴らしい。

(高柳委員)

取り合わせの句が多い連作だった。

「吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす」からぼろぼろになった灰が見えてよかった。

季語との取り合わせのセンスは高いが、もう片方のフレーズがやや強引。

例えば「鉄塔に深き傷跡春の蝶」はどんな傷かが「深き」からは分からなかった。人為的なのか、暴風的なのか。

「ほそぼそと蕎麦屋のつづく夾竹桃」の「蕎麦屋」と「夾竹桃」はよいが、その通りという空間にぽつんぽつんと蕎麦屋が立ち並んでいるのか？と少し疑問だった。

「ネギは剣子につはものの目があれば」は子どもが剣を構えているのは分かる。「子につはものの」のところの外連味が強すぎた。

取り合わせのセンスが成功している句があるからこそ、生かし切れていない句が気になった。

(岸本委員)

「ほそぼそと蕎麦屋のつづく夾竹桃」は一軒の蕎麦屋が閉店せずが続いているという時間的解釈もある。

(視聴者)

五感のきれいな句が多い。「廃校舎いま春塵の部屋となる」、「折り紙はしづかに力み立葵」、

「うつすらと亀に唇ある夜涼かな」などの句は描写や認識が面白い。中でも「山粧ふ脚立を出してゐる隣家」は秋冷の感じとそこに暮らす人の生活の連動がよく出ている。

他の連作と比べても、文法や仮名遣いにミスがなく気持ちが良い。「書き出しのとみに定まる夜食かな」など熟れた表現が多く、俳句の勉強の痕を感じた。「うつすらと亀に唇ある夜涼かな」、「猛犬の尾のなまぐさき野分かな」、「吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす」など刺激的な取り合わせが面白かった。欲を言えば取り合わせばかりでなく、「乾ききる前の小径や金木犀」などの素朴な写生句も読みたかった。

…………… ↓ 最終選考選評 ↓ ……………

大賞作品を決めるに向けて (高柳委員)

点数で切るか、一席の入ったものを含めて切るかといったところだろうか。

(岸本委員)

三人の一席も含むよう、4点以上で線引きをして再検討をするのはどうか。

(遠藤委員)

私としてはよくよく迷って、9「書き出し」を推したので、やはりこれに大賞を差し上げたいと思う。

(高柳委員)

私のみだったが、一席に推した35「風の記憶」も非常によい作品だと思う。もしお二人にとって「風の記憶」の受賞が厳しそうであれば、改善点などを含めたご意見を改めてお聞かせいただき、他の高得点句作品の審議に移るのはどうか。

(岸本委員)

少し黙考するお時間をいただきたい。

(休憩)

(岸本委員)

各作品を同じモノサシで評価するのは難しい。どの特徴を捉えて評価するのかという点になる。

季語の扱い方で傾向を分けることができるのでは。

季語の本意や情趣を句のなかできめ細やかに発揮しているかと言えば、9「書き出し」は季語の軸足はしっかり把握したうえで活用している。

35「風の記憶」は季語に身近なモチーフを取り合わせて、季語の世界を深掘りしている。

この二編と比べて、18「火やつかむ」と26「国境」は季語をいじめながら、無理をさせているともいえる。

例えば18の「**右折する車が二列春の嵐**」は定型の「春嵐」ではなく敢えての「春の嵐」なのだろう。

「**魚屋の釣銭濡れて城ヶ島**」はさっき褒めたが実は無季で、しかし地名が中心となって句としてサマになっている。18の句の多くは文脈のなかに季語が入り込んでいる。これに比べると、35は文脈や句に季語が十分に溶けきっていないような印象。

26の「**風薫るキウイ畑の廃車かな**」の季語「風薫る」は取り合わせのようで、その文意・情景のなかの一要素である。

季語をいじめ抜いて書いたこの26と18を、私は予選通りに改めて推薦したい。

(遠藤委員)

9「書き出し」は力を入れて丁寧に作っていて、それでいて句にはしなやかさがある。
対する 18「火やつかむ」は四席に推して、9とは対照的に剛毅な連作である。
26「国境」は魅力的ではあったが、この連作にはいれなくていいと思える句が若干あったように思う。
35の「風の記憶」は好きな世界で、9とも違うようで実は近い句の世界を感じている。

(高柳委員)

私は先ほど9「書き出し」に対して、フレーズが強引と言ったが、うまい句もある。
例えば「鈴虫や地盤のゆるき町の昼」は、弱弱しく鳴く昼の「鈴虫」が見えてくる。
「乾ききる前の小径や金木犀」は雨後の道のぬかるみや、濃く匂う金木犀が伝わる。
よい句がある一方で、私も取り合わせを重視する作句姿勢であるので、粗が気になった句もある。
「ほそぼそと蕎麦屋のつづく夾竹桃」はやはり「ほそぼそとつづく蕎麦屋や」にしてもらわないと時間的な長さは伝わらない。
「折り紙はしづかに力み立葵」はと何を模っているのかを示してほしかった。
完成度は高い句もある連作だが、良い句と疑問句で分かれている。

26「国境」について(岸本委員)

「窓拭きの跡を拭きをり木の芽風」や、「オロナミンCが美味くなれば夏」、「一声のスコンと抜ける初芝居」のとぼけた味をプラスアルファで評価してよい。
「くさめして背中あたりがかゆくなる」の感覚はピンと来ない。
「山笠や今日はじいじの晴れ舞台」は句の意味は正確に伝わるが、他と比べると当たり前。
句の完成度ででっぱりひっこみがあるのは弱い。

(高柳委員)

26「国境」は「風薫るキウイ畑の廃車かな」、「勝手口梔子の花たそがるる」、「冬空にがっつくメンチカツサンド」などいくつかの句が飛び抜けていい連作。
真ん中から後半にかけて厳しい。この高得点作品のなかで勝負するのは少し厳しいか。

(遠藤委員)

26「国境」は6点作品となる魅力はあるが、大賞に推すには凸凹がある。

9「書き出し」と35「風の記憶」の比較について(高柳委員)

35「風の記憶」は「中敷のロゴ消えかけて夏の果」、「シュート決め掲げた拳秋高し」など、映像の浮かぶ取り合わせの成功句が多い。

9と比較すると、確かに両者とも取り合わせの句が多く、季語の本意を重視している取り合わせである。こちらの35の方が飛躍という面では大人しめな、つまり驚きよりは共感を重視しているところがあるかもしれない。

例えば一句目同士を比べると、35の「**自転車の籠に斜めや麦わら帽**」の季語「麦わら帽」の付け方は共感や納得で、対する9の「**鉄塔に深き傷跡春の蝶**」の「春の蝶」の合わせ方は驚き。飛躍というより、現実感のある納得の35に惹かれた。35で一番飛躍しているのは「**演説の襷の肩に来る蜻蛉**」だろう。

(遠藤委員)

35「風の記憶」は形容詞をほとんど使わず、物で推して、抑制の効いた表現を感じる。読み手である私がその**魅力**に形容詞をつけたくなる。情景そのものだけで詩になっている。

(岸本委員)

確かに35「風の記憶」は形容詞がないことで、句の措辞が筋肉質。季語の使い方としては、安心して読めるという気がする。

35は「**自転車の籠に斜めや麦わら帽**」や「**水鉄砲打って打たれて濡れし髪**」など、物が季語である句もよく出来ている。

高柳克弘著『究極の俳句』を読むと、「全ては取り合わせだ」という説明がある。

一枚の絵のなかに収まっている良さはあるが、私は9の「**吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす**」のような、額縁からはみ出したような取り合わせにも魅力を感じる。

35は「秋の風」「秋の夕」などリスクの低い季語の斡旋がちょっと弱い。ただ、引き締まった表現というのは理解できる。感じをそのまま形容詞等で述べることをせずに、我慢しているのが良い。

(岸本委員)

18「火やつかむ」のタイトル句の「**打つ独楽の刹那にはやし火やつかむ**」や、先頭句の「**その終わりまた蜘蛛の罟の始めたり**」がすこし読みにくい。

「**秋蟬や柵の錆びたる海の町**」、「**太刀魚の大きくしなる腕の中**」、「**手に鍵が揺れて流星群の夜**」、「**餌に集く鯉の間抜けを霰かな**」、「**惰行する寒夜急行床の缶**」、「**数羽の鳩白し寒暁広がりぬ**」、「**右折する車が二列春の嵐**」、「**春燈やまた倒しみる不倒翁**」、「**犬小屋に戸のなかりけり麦の秋**」、「**魚屋の釣銭濡れて城ヶ島**」、「**檻の獅子空蟬を踏み毀ちたる**」など、面白い句がうまくバラけていて飽きずに読める。「惰行」は「蛇行」の変換ミスかもしれない。いい句の間にある他の句も、例えば「**猫じやらし遊び足らずに死んでゆく**」も深読みすれば面白い。傷も少なく、光るものも多い。

(高柳委員)

確かに 18「火やつかむ」の「**惰行する寒夜急行床の缶**」はいい。助詞を削って言葉に無理をさせているが、ルールを犯したような言葉の使い方が面白さになっている。一瞬「寒夜」が「惰行」すると思わせるような錯覚が肝。

その一方で「**薄氷をそつと叩き割ろうとする**」、「**卒業子いつまでも手を見てゐたり**」など、平板な句もある

(遠藤委員)

18「火やつかむ」は言葉を詰め込んで密度が濃く、成功している。私にはないものを持っている。その一方で表現が凝りすぎている。「**打つ独楽の刹那にはやし火やつかむ**」や「**その終わりまた蜘蛛の罫の始めたり**」など、私では句意を正確に説明できないものがある。

(岸本委員)

18「火やつかむ」の「**卒業子いつまでも手を見てゐたり**」は「手」という物を出しているし、悪くはない。また、「**薄氷をそつと叩き割ろうとする**」は、強く割ると顔に水がかかったりするのだから、そう思えば共感性の高い句ではある。

「**湯煙に隠るほどの噓かな**」は露天風呂のなかの遊び心や、「**猫じやらし遊び足らずに死んでゆく**」を「枯れる」ではなく「死ぬ」としたところに外連味やがある。一見変だなという句も俳諧として評価したい。

(高柳委員)

9「書き出し」と35「風の記憶」は取り合わせの性格は違うが拮抗している。

(遠藤委員)

他のお二方の意見に異を唱えるつもりはないが、私はやはり9「書き出し」を推す。

(岸本委員)

9「書き出し」が「**吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす**」、「**うつすらと亀に唇ある夜涼かな**」など、リスクをとっていることは評価したい。

(高柳委員)

9「書き出し」は語りたくなる句が確かに多い。

「**鉄塔に深き傷跡春の蝶**」、「**うつすらと亀に唇ある夜涼かな**」など、それぞれの作者が考えることを要求しており、読み応えを感じる。

35「風の記憶」のパンチ力は9に劣るかもしれないが、一連のなかで統一した世界や作中主体を感じさせる工夫がある。

(岸本委員)

35「風の記憶」が句から句へ流れがずーっと繋がっているように見えるのは見事。背景が見えて味がある。

9「書き出し」は後ろのほうの句がやや弱いという点はある。

(高柳委員)

9「書き出し」と35「風の記憶」の戦いかもしれない。

(岸本委員)

どんどん違う世界が見えてくる連作も面白い。歌仙のように景が転じていく連作として読む考え方もある。いっぽう35「風の記憶」は一人の主人公を想定して読むことができる。

(高柳委員)

歌仙的といえ、18「火やつかむ」は手数が多い。「**情行する寒夜急行床の缶**」のような句がある一方で、「**冬銀河その譜は未完かもしれず**」のような形而上的俳句もある。連作と見ると、色々な風景を思う。

(遠藤委員)

9「書き出し」は大賞に相応しいと思う。

(高柳委員)

取ってはおらず、傷もある一連だが、異存なし。

(岸本委員)

「**気苦労を桜が隠しゐる通り**」、「**電器屋の列にぎやかにクリスマス**」などはケチをつけたい句もあるが、全体的には良いと思った。

(遠藤委員)

良いと思う。

(高柳委員)

テイストが異なる二編なので、18「火やつかむ」、35「風の記憶」の両方が奨励賞を受賞するので良いのでは。賞の幅広さを示す上でも両方でいいのでは。

(岸本委員)

無季の句は、歌仙の中の雑の句のようなものであり、連作の中では気にならなかった。

(高柳委員)・(岸本委員)

26 の「国境」は捨てがたいが、今回の受賞はのなしでやむを得ないか。

..... ↓ 表彰 ↓

9 「書き出し」は立教池袋高等学校の辻村幸多さん、赤松優さん、岡部優司さん、三宅爽太さん、杉浦拓隼さん、藤井万里さんの連作。

18 「火やつかむ」は海城高等学校の蔣騰さん、住谷拓明さん、日高一樹さん、関友之介さん、深見啓太さん、南幸佑さんの連作。

35 番「風の記憶」は神奈川県立横浜翠嵐高等学校の福田彩月さん、酒井美穂さん、相原乙葉さん、岡本伊万里さんの連作。

本大会は第 4 回に続いて、句具さまにご協賛いただき、本年は副賞としてギフトセットをご提供いただいた。

秀逸 10 句 (以下略)

..... ↓ 総評 ↓

総評

(遠藤委員)

多数の応募で読み応えがあった。それぞれの作品に個性と特徴があり、選び甲斐があった。予選の俎上に上がらなくとも、いい句・新しい句がとても多くあった。俳句が新しく育っていることを感じ、今年も刺激を頂戴した。私も更新をしてゆきたい。26 「国境」のような新しい俳句を感じた。俳句は奥が深いと感じた。

(岸本委員)

賞である以上、読者に句を読んでもらえるように、いかに作るかが大事。俎上に上った作品はそれぞれ工夫があった。選考会の限られた時間では 9 割以上の句には触れられていないが、良い句がたくさんあった。遠藤さん、高柳さんの選評を聞いていると、見落としていた作品に気づいた。俳句を作るばかりではなく、読むことの面白さもこのような場で広がっていく。

(高柳委員)

今回の特徴として、テーマ詠が多かった。一致団結する友情の力を感じ、楽しませてもらった。テーマ詠はどんどん作ってほしいが、その後で突出する句・少し外す句も構成として考

えて、一句ずつの強度も検討してみてほしい。多彩な句があり、何が面白いのかを決めるのは難しい。一つ言えるのは面白くしすぎないように、オチをつけないように、一部スキがあるような、ゆるみのある句があってもよい。

79「学校」に「**0時なり LINE で送る年賀状**」がある。手書きではない年賀状ということで面白い内容だが、「0時なり」とすると面白さを重ねてしまう。例えばここにとぼけたようなフレーズを入れてみてもよい。サービス精神をこらえて、淡々と情景を描く。